

季刊

医大

おらんくの大学病院

[高知大学医学部附属病院]

[Vol.12]

2021年  12月20日

発行

特集

Long Interview

コロナを恐れても、コロナに屈しない!

**冷静、確実、迅速、そして誠実にワクチン接種に取り組む
高知大 ワーキンググループのチームワーク!**



緩和医療科

緩和医療科 科長 北岡 智子
緩和ケアセンター センター長

●おらんくの食事

栄養管理部から「冬」のおすすめ料理

●医大のスタッフ

薬剤部 冬のイベント案内

【本大学病院での
コロナワクチン接種に関する
ワーキンググループ立ち上げまでの
経緯をご説明ください。】

瀬尾▶高知県内の医療従事者の優先接種は国立病院機構高知病院、JCHO(地域医療推進機構)など国の機関からスタートしましたが、「次がうちだから、君がリーダーになってワーキンググループを作るように」と病院長から指令が出ました。

その時点で、組織体制や人選は頭にありましたから、そこは順調に進みました。

【どのような分け方をされましたか。】

瀬尾▶接種のキーパーソンとなる医師の手配を含め全体の統括が私で、接種介助などにあたる看護師の手配を副看護部長の坂本さんに。また差配や接種の段取りなどを人事課の松崎さんにお願ひしました。

他にも県との事務連絡を総務企画課に、またワクチンの受入れ管理を薬剤部が受け持つよう取り決めました。チーム統括の立場として、安全第一に人員配置や現場での救急対応ができるシステムづくりのため、新しい機材の購入や救護室の設置なども行いました。



【接種における一連の行程で、工夫や改善された点などはありませんか。】

瀬尾▶一般的な接種会場では、医師が問診後に注射を、看護師がその介助をしますが、本院では問診場所と接種場所を区別することにしました。同時に複数のブースを用意してもどこかのブースで滞ってもそこを補うスタッフを手配し、スムーズに流れるようにしました。

また、厚労省から問診、接種に関しては研修医を活用するようにとの指導があり、さらに歯科医師や臨床検査技師、救急救命士も接種業務が可との通達がありましたが、歯科医師以外は実技講習が必要でした。院内で講習会を実施することで、医師の数を減らし効率的に接種が行えたのです。

他にもアナフィラキシーショックの心配があり、専用の救護室を用意しましたし、気分の悪い人には横になってもらって接種するなどの工夫をしました。

【大学病院だからできた！
ということがたくさんありますね。
さて、当初頻繁に副反応について
見解が報道されていましたが、
大学側はどう捉えていましたか。】

瀬尾▶接種が先行していたアメリカなどから副反応に関する論文などが次々に発表され、病状の詳細も分かってきましたので、それへの対処としてドクターなら手術前の日は避ける、看護師なら部署内で接種日を分散など、院内でも調整しながら各部署の仕事に支障のない接種スケジュールをとってきました。

【さて、ワーキングの中での坂本さんの
役割について教えてください。】

坂本▶私の役割は、ワクチン接種が安全に提供できるための看護師配置が中心となります。もちろん、急変時にもしっかり対応できる体制づくりは必須です。接種までのプロセスを説明すると、まずはワクチンの保管管理と溶解は薬剤部に協力をお願いし

ました。看護師は注射器にワクチンを充填して打てる準備をします。それを接種ブースに持ち込み、接種する医師等の介助をします。そして重要な観察対応です。ちなみに本院では毎日約2時間で250～260名への接種でしたので、看護師12～15名体制で対応しました。

【聞いているだけでも
大変そうですが。】

坂本▶はい、もう(笑)。ワンチームとは言えそれぞれの部署から集まっていますから、瀬尾先生が指揮を執り、松崎さんが柔軟性を持ってきめ細かくサポートしてくれて、連携のとれた良いチームになったと思います。事前準備として、救急対応には何が必要か、救急対応の部屋数やベッド数、安全に接種を



するための人員配置を考えました。それから、マニュアルを作り担当者へのオリエンテーションをして、初めて業務に入る人には事前見学で流れを把握してもらったり毎日接種開始前にブリーフィングを行い、それぞれのブース担当との情報共有も行いました。また観察ブースの看護師配置に加え、横になったの接種や、救急対応あるいは救護室専属の看護師が必要と考え、人員を確保しつついかに安全に運営していくかなどに最も気を遣いました。一日一日を担当者・接種を受ける人の安全を守り、質を担保した運営をするのが私の役割だったと思います。

松崎▶接種介助についても、接種する人が新人であればベテランの看護師をつけるなど、大人数にも関わらずきめ細かく人員配置をされているのには、ただただ驚かされました。

【松崎さんは
全体のコーディネーター的な
役割だったと伺いましたが。】

松崎▶多職種が関わるワクチン接種では、その役割分担を明確にしなければならず、その上で情報を共有しつつ、それぞれの職種の方が業務に集中できるよう調整したり、接種を受ける側の人の日程や体調などの聞き取りをしながら、接種を安全かつスムーズに進行させるための調整を任せていただきました。

【コーディネーターとしての
ご苦労などはありませんでしたか。】

松崎▶当初はワクチンの情報も少なく、接種に対する不安の声がかなりありました。

自分でもワクチンに関する情報を調べたり、皆さんからの質問などにも瀬尾先生や坂本さんの力を借りて、フィードバックしながら少しでも安心して受けていただくよう心掛けました。

ところが接種に理解を示してくれる人が多くなった途端ワクチンが供給されなくなったりとその後の調整には苦労もありましたが、回を重ねるごとに“もっと効率よくしたい”という意識が強くなり、会場づくりも感染対策にも配慮しつつ動線をチェックしながらレイアウトを変えたり、受ける側の人たちの流れを見直したり、最初に比べると現在の形はほぼ完成形でスマートになったと思っています。

【統括チーフの瀬尾先生は
振り返ってみていかがでしょうか。】

瀬尾▶チームとしては本当によくやってく

れたと思いますよ。大学病院の職員から接種が始まり医学部の学生へ。続いて職域接種が始まり朝倉、物部キャンパスなど医学部以外の学生さんに加えて他大学の学生さんも来るようになると、注射が苦手な方が増えたような気がします。ただストレッチャーも十分な台数を備えていますし、救急対応が必要な場合に専門チームを呼ぶシステムも事前に準備していたので、安心して接種していただけたと思います。

【大学病院だからこそ
好結果であるでしょうし、
これからのワクチン接種の
模範にもなったわけですね。】

坂本▶そうですね。各職種が密に、そしてタイムリーに情報を共有できたことや、その時々課題に対応することで様々な事がブラッシュアップされ、次何が来ても対応できるという自信にもつながりました。

3月から始まった接種を無事終えられたのは、ワーキングメンバーはもちろん、さまざまな部署の職員の協力によるものだと感じています。



松崎▶接種を受ける側の人たちも協力的でしたし、さまざまな事態に備えて、院内の施設や物品の貸し出し、空調や照明などの不備があった場合には、すぐに対応してくれるなど、本当に有難かったです。また、不安な表情や接種を躊躇していた人が無事に終わって帰るところを見た時は安堵したことです。この経験をさせていただいて良かったと感じています。

瀬尾▶急ごしらえのチームでしたが、メンバーの創意工夫とチームワークの良さで乗り切ることができました。

我々は大学病院本来の業務もあり、のんびりやっているわけにはいかず、“決めた接種時間に必ず来ていただく”ことで無駄がない効率的な接種システムを構築できました。結果的に大きなトラブルもなく、今改めてメンバー一人ひとりに感謝しています。

(取材 2021.10.29)

コロナを恐れても、コロナに屈しない！ 冷静、確実、迅速、そして誠実にワクチン接種に取り組む 高知大 ワーキンググループのチームワーク！

日々報道される新型コロナウイルスの感染者・死者数に世界が震撼し続けたこの2年間。ワクチン接種開始後も、その遅延や接種順、メリット、デメリットなどが取り沙汰される中、高知大学でも医療従事者から職域へと順次接種がスタートした。今回は、ワクチン接種のために立ち上げた高知大学ならではのワーキンググループの活躍と超多忙な日々を、中心となって動いた3名に振り返ってもらった。



新型コロナワクチン接種実施に係るワーキンググループ



座長 総合診療部長 **瀬尾 宏美** 先生
せお ひろみ



看護部 副看護部長 **坂本 美和** さん
さかもと みわ



人事課安全衛生係 **松崎 由紀** さん
まつざき ゆき

緩和医療科

緩和医療科 科長 北岡 智子
緩和ケアセンター センター長 きたおか のりこ



2021(令和3)年7月に高知大学医学部附属病院に緩和医療科が設置されました。

緩和ケアチームに専従の医師が加わったことで、
幅広くきめ細やかな緩和ケアが提供できる体制となりました。

1. 緩和ケア

「緩和ケアとは、重い病を抱える患者やその家族一人一人の身体や心などの様々なつらさをやわらげ、より豊かな人生を送ることができるように支えていくケア」(日本緩和医療学会)のことです。

診断されてから治療中も、患者さんとその家族の生活のサポートをしています。現在では、がんだけでなく、がん以外の重い病気の患者さんと家族も対象となっています。

2. 緩和医療科が加わった緩和ケアの体制

都道府県がん診療連携拠点病院である本院には、緩和ケアセンターが設置されています。緩和ケアセンターで専門的な緩和ケアを提供する部門として、今まで緩和ケアチーム・がん看護外来が活動していましたが、この度緩和医療科が加わり、より幅広く緩和ケアを提供できる体制が整いました。

緩和ケアチームは、医師・看護師・薬剤師・管理栄養士・リハビリスタッフ・医療ソーシャルワーカーなど多職種が所属しており、主治医や看護師からの依頼を受け、コンサルテーションチームとして活動をしています。多職種で対応することによって、身体症状や精神症状だけでなく、家族ケアや退院支援など患者さんとその家族の様々な問題に、多方面からのアプローチを実践しています。

がん看護外来は、専門的な知識や資格を持った看護師が、療養生活上の相談を受けています。病気や治療、副作用の疑問、気分の落ち込み、家族としての悩みなど、担当の医師や看護師と連携しながら対応しています。

緩和医療科には、痛みや息苦しさなど体のつらさに対応する医師と、不安や気持ちの落ち込み、不眠など心のつらさに対応する医師がおり、緩和ケアチームにも所属しています。これまでのチーム活動では、麻酔科や精神科など、自身が所属する科の診療も行っていたため、主に入院患者さんへの対応に限られていました。しかし、緩和医療科の設置に伴い専属の医師として配置されたことによって、入院患者さんだけでなく、外来患者さんにもきめ細やかに対応できるようになりました。今後は、緩和医療に携わる医師の育成も行っていく予定です。

また高知県内には、本院以外に専門的な緩和ケアを提供する施設として、入院で療養する緩和ケア病棟や、在宅での療養を支援する訪問診療・訪問看護などがあります。緩和医療科は、治療チームと連携しながら、病気を抱える患者さんとその家族の心と体の痛みやつらさを和らげ、希望する場所でその人らしい生活を送れるよう、地域の緩和ケアを担う医療機関・施設とともに、支えていきたいと考えています。



緩和ケアセンター



新年の集まりにもおすすめ!

* 芋饅頭カニあんかけ *



風味、食感、彩り…
三拍子揃った冬の日の贅沢はいかが?

【材 料】(2人分)

●芋饅頭

じゃがいも(男爵がおすすめ)……………1個(約150g)
A { 白玉粉……………15g
水……………50ml
塩……………二つまみ
カニむき身……………5g
片栗粉……………適量
揚げ油……………適量

●あんかけ

B { 水……………200ml
薄口しょうゆ……………大さじ1
みりん……………大さじ1
砂糖……………大さじ1/2
酒……………大さじ1/2
和風だしの素……………小さじ1/2
カニむき身……………15g
三つ葉……………5g
水溶き片栗粉……………適量

【作り方】

●芋饅頭

- ①じゃがいもの皮をむいて適当な大きさに切り、ボールに入れて500wの電子レンジで5分加熱する。加熱後、つぶしておく。
- ②Aの材料を混ぜ合わせる。
- ③①に②と塩を加え、しっかりと混ぜ合わせる。
- ④③を二等分にして中にカニむき身を包み、まわりに片栗粉をまぶしながら饅頭形に整える。
- ⑤④をきつね色になるまで両面焼き揚げにする。

●あんかけ

- ①Bを鍋に入れ一煮立ちさせる。
- ②①にほぐしたカニむき身と3~4cmの長さに切った三つ葉を入れ、水溶き片栗粉でとろみを付ける。
- ⑤の芋饅頭にあんをかけて出来上がり!

私達が
担当しました

栄養量 (1人分)	
エネルギー	191kcal
たんぱく質	4.0g
脂 質	4.7g
炭 水 化 物	30.7g
食塩相当量	2.4g

一言メモ

じゃがいものビタミンCはでんぷんに包まれているので、加熱しても壊れにくいと言われています。カニをキノコや鶏そぼろなどに変えてアレンジ自在です!

調理師
高橋 耕平
たかはし こうへい

管理栄養士
中島 伊織
なかしま いおり

薬 剤 部

Department of Pharmacy

部長
宮村 充彦
みやむら みつひこ

薬のスペシャリストとして、医薬品の適正使用を推進し、
安全な薬物療法・新規エビデンスの創出に取り組んでいます。



業務

薬剤師の責務は医薬品の適正使用であり、医薬品の供給の他、医療安全の確保やチーム医療への貢献を薬剤部は行っています。薬剤師が参画するチーム医療には、医療安全管理、感染管理、がん化学療法、緩和ケア等があります。また、入院患者さんに対する適正な薬物療法の管理・指導、医薬品の適正使用やその管理等の病棟薬剤業務、さらに入退院支援や薬薬連携等も継続的に実施しています。

研究・教育

創薬および剤形の研究等を行い、医療につなぐことも大学病院における薬剤部の特徴です。研究面では、サルコペニア等、特に高齢化社会に対応する未病対策に関わる研究に力を入れており、多くの成果を挙げています。また、学会発表、論文作成も行っています。高知県には薬系大学が無いことから薬学教育にも寄与し、また、医学生・看護学生に対する臨床薬理学・薬事関連法規を中心とした講義を行っています。

コロナ禍における取り組み

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、

薬剤部では、治療薬やワクチンについて、情報収集・伝達および医療従事者に対する教育から、管理・調製にも関わっています。また、院内製剤で調製した各種消毒用エタノール製剤を高知大学教職員等に配布するなど、感染防止対策にも積極的に関わっています。

医療を取り巻く環境の変化とともに、薬剤部に求められる役割も変化しています。移り変わる環境の中でも、適正な薬物療法のため、薬剤部は今後も業務を発展させていきます。

業務概要

医薬品の適正使用の推進
薬物療法の管理・指導
医薬品の供給・管理

薬剤部が掲げる目標

医療安全の確保
医薬品の適正使用
チーム医療の推進
薬薬連携の充実
病棟活動の充実
客観的エビデンスの構築
薬剤師の資質向上
創薬および剤形の研究

9つのセクション

調剤室
薬剤管理室
薬務室
薬品情報室
病棟薬剤業務室
外来薬剤業務室
臨床試験・高難度医療支援室
製剤室
試験研究室

50

名
薬剤師 41名
医専・事務補佐員 9名

RKCラジオ
「気になる健康
ファミリドクター」

【放送予定日】
毎週月曜日 午前10:35～(8分間)

※放送内容は後日附属病院
ホームページに掲載されます。



- 21年12月27日(月) 風邪とインフルエンザ [感染症科/山岸 由佳]
22年 1月 3日(月) 白内障 [眼科/溝渕 朋佳]
22年 1月10日(月) 赤ちゃんの聞こえの検査と難聴 [耳鼻咽喉科・頭頸部外科/小林 泰輔]
22年 1月17日(月) 脳梗塞と生活習慣病 [脳神経外科/上羽 佑亮]
22年 1月24日(月) 遺伝性泌尿器科腫瘍について [泌尿器科/田村 賢司]
22年 1月31日(月) 腫瘍と腸内環境 [病理診断科/村上 一郎]
22年 2月 7日(月) 加齢と嚥下機能 [リハビリテーション部/矢野 衆子]
22年 2月14日(月) 抗がん剤治療中におうちで気をつけること [薬剤部/野村 政孝]
22年 2月21日(月) ヘリコバクター・ピロリ感染症の除菌療法 [内科(消化器)/山田 高義]
22年 2月28日(月) 関節が痛いけど年齢のせい?リウマチ? [内科(内分泌代謝・腎臓)/大出 佳寿]
22年 3月 7日(月) 新型コロナの感染経路と予防 [内科(呼吸器・アレルギー)/山根 真由香]
22年 3月14日(月) コロナと循環器疾患 [内科(老年病・循環器)/有馬 直輝]

